

経尿道的膀胱腫瘍切除術にて膀胱を 温存した再発性尿膜管癌の1例

みつ い よう ぞう あん じき はる き
三 井 要 造 安 食 春 輝¹⁾
しい な ひろ あき
椎 名 浩 昭¹⁾

キーワード：尿膜管癌，部分切除，異所性再発，膀胱温存

要 旨

症例は63歳，男性。無症候性肉眼的血尿を主訴に近医を受診した。膀胱鏡検査で膀胱頂部に腫瘍性病変を認め，精査・加療目的で当科紹介となった。経尿道的膀胱腫瘍切除術（TURBT）にて尿膜管癌 Sheldon 分類Ⅲ A期と診断し，膀胱部分切除術＋尿膜管全摘除術およびリンパ節切除術を施行した。病理結果は尿膜管癌，G2>G3，ur 0，ew 0，ly 1，v 1であり，術後補助療法を2サイクル施行し外来経過観察とした。術後7，11ヵ月目に表在性腫瘍の異所性再発を認めたが，いずれも TURBT で完全切除することで膀胱温存が可能であった。

諸 言

尿膜管癌は泌尿器科領域の悪性腫瘍の中では比較的稀な疾患である。遠隔転移の頻度は低く，膀胱温存目的で膀胱部分切除術が選択されることが多いが，残存腫瘍による膀胱内再発をしばしば経験する。今回われわれは膀胱部分切除術＋尿膜管全摘除術後に膀胱内異所性再発を二度来し，経尿道的膀胱腫瘍切除術（TURBT）にて膀胱を温存した尿膜管癌を経験したため，文献的考察を加え

報告する。

症 例

患者：63歳，男性
主訴：無症候性肉眼的血尿
既往歴：特記すべき事項なし
合併症：特記すべき事項なし
現病歴：2008年に無症候性肉眼的血尿を自覚したが放置していた。その後再度血尿が出現したため，2010年1月に近医泌尿器科を受診した。膀胱鏡検査にて30mm大の腫瘍を膀胱頂部に認め，生検により urothelial carcinoma>adenocarcinoma，G2と診断され当科紹介となった。
初診時現症：身長 156.0cm，体重 62.7kg，血圧

Yozo MITSUI et al.

- 1) 島根大学医学部附属病院泌尿器科学教室
2) 東邦大学医療センター大森病院泌尿器科 (H28.4.1より)
連絡先：〒143-8541 東京都大田区大森西6丁目11-1
東邦大学医療センター大森病院泌尿器科